

児童、学生、教育機関とキャリア教育

政策・メディア研究科特任講師 宮地夕紀子

昨年4月のニューズレターでは、湘南藤沢キャンパスに新規開講された「若年者のキャリア学習」について紹介した。2010年秋学期でも引き続きこの授業は開講されたが、その翌年3月に大学を卒業する予定者の就職内定率は過去最低値に達するとされ、失業のしわ寄せが明らかに若年層に向けられている中、開講時、キャリア教育はやや重たいテーマと化していたように記憶している。

初回の授業で、履修についての希望等を学生に記述してもらったところ、彼ら自身の就職についての不安、会社・職業選択についてのわからなさ、自分自身の将来への不安について、授業を通して考えていきたいという内容が見られた。2009年の開講時では、子供たちの教育活動に関心がある、そうしたNPOに参加している、といったような履修の動機、コメントが中心であったのを考えると、何か前回とは違うなという印象を受けた。それらはただ単に就職できないかもしれないという恐れだけでは無く、流動化、グローバル化、情報化、なんだか解らないけれども変化するスピードが加速する社会において、そもそも働くということ、社会に出て行くという事実に対して真剣に向き合いすぎるがゆえの、とまどいのようにも感じられた（そしてこの後に、私たちは東日本大震災を経験することになる）。

そうした「真剣さゆえのとまどい」に対峙するために、この授業は、大学は一体何ができるのだろうか、何を扱えばいいのだろうか、筆者なりに考えをめぐらせてきた。まだ明快な答えは見つからないし、これからも見付きそうには到底思えないが、2回目となったこの授業を通して、キャリア教育とはなんぞやということについて専門家から教えてもらったこと、そして学んだことについてここに記しておきたい。

増加する大学生とキャリア教育

まず大学という教育機関、大学生とキャリア教育について考えてみたい。

大学卒業者の就職内定率低下は、すなわち若い人のキャリアにとって「働くことを通して得られる社会参加」という最初の一步が、「当たり前のこと、普通のこと」としては叶えられなくなりつつあることを意味している。大学を卒業して就職できないという状況は、その人にとって単に経済的糧としての仕事、働く場を得られない、ということだけに留まらない。安定した収入を得られないことに加え、社会参画という最初の機会がままならなくなることの影響は、長期的に見ても、個々人というレベルではもちろんのこと、社会の問題としても看過できるものではなくなってきた。

その対策として、大学生の内定率低下に歯止めをかけるべく文部科学省は「大学生の『就業力』向上計画5カ年計画」を打ち出し、昨年には大学設置基準に新条項として「社会的及び職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制」が加えられ、キャリア教育も大学と短大において義務化されることになった。

大学自身も、2008年のリーマンショック以降悪化した雇用環境に対し、大学として学生をどう支援するのか、とりわけ就職支援とその実績を入学志願者や保護者に向けてアピールする広報を取るようになったところもある。従来、就職指導として行われていたキャリア教育らしきものが、正課の授業として組み込まれるなど、大学の1つの大きな役割として「学生の生涯設計能力の確立」が重視されるようになっていく。

この背景には、景気の悪化による雇用環境悪化という要因だけではなく、バブル以降確実に増加してきた大学進学率（それを可能にした大学の拡大路線）とも関連があると指摘されている。たとえば、学校基本調査によると2010年の高校卒業生数は107万人弱、これは20年前の1990年、177万人弱という数値と比較すると、およそ6割である。一方、大学進学率は1990年に30%程度だったものが、2010年は54.3%と、半数以上が大学に進学するようになった。つまり、減少し続けている18歳人口が6割にまでなったとしても、大学入学者は増加しており、これを肯定的に説明するならば、大学という高等教育機関で学ぶ機会が拡大したということになるが、一方で高校の延長感覚で大学に進学してしまう者も増加したことは想像に難くない。ところが、高校までのような手取り足取りの指導を大学はしないし（しかし実際、必要に迫られて「手取り足取り」の生活指導をする大学もあると聞く）、自分で学びを切り開いていかなければ大学での学習生活は成立しない。高校で勉強するのは異なるマインドが必要である、その現実にいざ入ってみてから気づくということになる。

「キャリア教育」が文科省関連の文書に最初に登場したのは、99年の文部省中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善に関する小委員会」から出された答申だとされているが、タイトルからもわかるとおり、特に「高校から大学への接続」が重視されていた。社会が、ビジネスが、仕事が情報化し、労働は高度知識化する中で、大学進学者が増えていくことは前提としつつ、しかしその年代の半分以上が高等教育機関に進路をとることを想定するに、必ずしも最初から学問への意欲が高い学生ばかりではなく、なんとなく進学するという層も登場することは想像に難くなかった。故に、高校から大学への移行をこれまでの「進学」と同様に捉えるのではなく、高校から大学の「接続」「連携」が必要であるとする指摘である。なぜ大学へ進学するのか。その先、社会人として職業人としてどう自分の将来を設計しようとしているのか。その意識付けが、高校のときからなされるべきである、という理屈である（その延長で、小学校、中学校でのキャリア教育の必要性が展開していった）。

その「キャリア教育」初登場の答申から10年以上が経過した。今年の春、大学を卒業して進学もしくは定職に就かない進路未定者は10万人7千人という統計がつい最近発表されたばかりである。様々な要因が背景にはあるが、高い意欲を持った高校生が大学へ進学し、そこで大学教育を受けた人材がスムーズに社会に入っていくという構図は残念ながら達成されているとはいえないだろう。今後は、大学におけるキャリア教育そのものが重点化されることについては上で述べた通りである。

「職業」の多義性とキャリア教育の総合性

筆者はここ5年ほど、学部の春学期に「ライフキャリア論」という授業を共同担当してきた。特に、人間の成長や発達を重要な視点に置きながらキャリアを考える（そしていずれ自分自身のキャリア開発にコミットし取り組む）基礎的な力を学生には養ってほしいというのが、この授業の狙いなのだが、この授業の最初に、職業という言葉の多義性について説明している。

たとえば、英語で“Occupation”とすれば、それは生計をたてるためにその人の部分を”占めている”ものを意味しているし、“Profession”となるとその専門性を自らが”告げる、名乗る”という意味が含まれ、“Vocation”は神から告げられる（“Vocare”）こと＝その職業の使命感を含んでいる。いわゆる天職、といっても良いかもしれない。

「会社へ行って、仕事をする」という1つの事実の中に、それは生活を成り立たせるための営みであり、自分のアイデンティティを構成するものとしての営みでもあり、なんだかわからないけれどもそうせざるはられない、自分以外に誰がそれをするのだ、というような使命感を持ってやっている、ということもあるかもしれない。「働く理由は何か」という間にシンプルに答えられないのは、私たちにとって職業が持つ意味は多様であると同時にダイナミックに変化していくが故であろう。

とはいえ、キャリア教育を考える以上、何らかの切り口を持ってしてアプローチする必要はある。やや古い資料ではあるものの、今もって日本における職業の定義として言及される尾高（1941）は、「職業とは個性の発揮、連帯の実現および生計の維持をめざす」「人間の継続的な行為様式である」としている。その人の持っているものが表れているということと同時に、社会のつながりの中でそれらは表されるものであり、同時に経済的な基盤となるものであり、それらがある一時点の話ではなく継続的に行われているということを示している。

そして今、私たちがキャリア教育と呼んでいるものもまた、この3つに類型できるのではないだろうか。

「個性の発揮」についていえば、その発揮される中身である自分の興味、関心の棚卸しや価値観について、内省的に追求するものである。これらは自分探しという果てなき旅に人を迷い込ませてしまったり、花田先生の指摘する青い鳥症候群へまっしぐら、という危険性もはらんでいるものの、キャリア教育の王道とも言えるアプローチである。

「連帯の実現」とは、私たちの職業、仕事はそれだけで成立しているものではなく、「社会」という繋がりの中で存在しているということ、またひとりひとりが社会や周囲から期待されている役割をきちんとまっとうするという、いわば規範的な要素を含むものと言えよう。上述の「個性の発揮」的キャリア教育が行きすぎるときに、カウンターバランスとして必ず登場するのがこの「社会視点からのキャリア教育」である。

「生計の維持」とは、すなわち食い扶持を得られる職に就くための教育、いわゆる就職指導的なキャリア教育と言えよう。極論だが、個性の発揮だの社会の役割だと言っても、生計が立てられなくては話にならない。大人として社会人として、何よりも就職先をまずは得ること、そういうキャリア教育（指導といったほうが良いだろうか）も当然、必要である。すでに述べたとおり、特に、淘汰の時代にあつてこのタ

イブのキャリア教育は、決定的に重要であると考える大学もあるだろう。

この3つの要素が等しく達成されるべきということではない。ある時期は生計維持を優先順位高くすることもあってあろうし、シニアになればより自分らしさを仕事の中で表現したいと考えるかもしれない。人によっては、何よりも社会における繋がりの中での仕事を意識することもあるだろう。まして、時間的なこと、経済的なこと、物理的なこと、自分自身の能力や志向性など、現実にはいろいろな制約、制限のもとに生きている中で、どうすれば「自分のキャリア」を生きられるのか。それを自分で切り開くだけの力をつけることがキャリア教育の最終的なゴールではないかと筆者は考えているのだが、これはまさに総合教育であり、「アート」ではないかとも思っている。しかし残念ながら、(もちろん全員ではないが)学生から「すぐに就職に役に立つ内容ではなかった」というような授業のフィードバックで貰うこともある。キャリア教育のテクニカルな面を軽視するつもりは全くないが、それだけではないのだよ、ということを手を替え、品を替え、言葉を替えて呟き続けるつもりである。

キャリア教育の根底を支えるもの

そんな大学生たちが取り組んだ「若年者のキャリア学習」の内容に戻ろう。学生たちがグループワークを進める合間に、ゲストスピーカーを何人かお呼びしているのだが、中でもその後のグループワークの展開に大きなインパクトを与えた、労働政策研究・研修機構、下村英雄先生のお話を紹介したい。

子供たちが家庭内においてどのようなことを保護者から言われて育つと、それらが職業意識の高さに強く影響するのか、という調査の紹介が下村先生からなされたのだが、たとえば時間は守らなければならない、お年寄りの世話はしなければならない、男の人は子どもを育てたり家を掃除したり、ご飯をつくったりすることが大事である、など、保守的なものから男女共同参画的な内容まで色々な「保護者から言われるメッセージ」がある中、最も強く職業意識への影響を与えるものは「毎日を大切に生きることが大切である」と「子どもがいてよかった」この2つであったという。ちなみに、授業中、クイズ形式でこの問いが投げられたとき、学生達が第一に選んだ回答は「努力することは大事である」という選択肢であった。

「努力することは大事である」と「毎日を大切に生きること」は類似している価値観のようで、少しだけ異なる。努力するということは、そこにある程度の方向性が存在することを前提となっている。それは目標、達成したいことなど、時間軸の力点が「将来」にあるはずである。ということは、第一義に大切なものは将来であって「今」は「将来」のために犠牲にしても仕方のないことだという考え方、つまり今は将来の手段なのだという発想にもなり得る。一方、「毎日を大切に生きること」は、必ずしも数年後の将来のためということではない。今は将来のための手段ではなく、今この時点で目の前にあることに取り組むこと、そこにエネルギーを注ぎ、力を出すことに価値を置く。そうした積み重ねが大事だという価値は、「将来」である職業に関する意識にも確実に結びつくということであった。

もう1つの「子どもがいて良かった」はどうであろうか。スキルや知識、学校で習ったことは、日々接

していたり使わったりしなければ、忘れてしまうこともある。しかし、自分がこの世の中において喜んでくれる人たちがいるということ、その感覚は後々までその人のキャリアに、人生に大きく影響することになる。たとえどんな言葉で伝えられたかという詳細は忘れてしまったとしても、である。

たとえばこうしたキャリアを歩みたい、プロフェッショナルになりたい、貢献したい、目標を持ちたい、そうした心の活動をしている自分自身を何より自分自身が肯定できないとなると、根幹がゆらいでしまいかねない。だからこそ、家庭内で「子どもがいてよかった」というメッセージが子ども達に発せられているかどうかは、職業意識に対して強く影響するということであった。

キャリア教育では、今現在ではない先のことを扱うものだという思い込みがあるならば、この「目の前にある毎日を大切にすること」もまたキャリア教育であるという指摘は、私たちがつい忘れてしまいそうになる足元の大切さ、日常というものの大切さを思い出させてくれる。また、「自分が何かをしたこと」に対する評価ではなく、「居てくれてよかった」という絶対的な肯定感に基づく自己観の存在への指摘は、日頃そうした感覚をそれほど意識しないままに生活している我々に、何かを気づかせてくれる。

そして、これは若年者、小学生にとってのキャリア教育に限った話ではないのかもしれない。授業を履修している学生たちは、「これは小学生の話である」という理解ではなく、まさに自分たち自身のこととして受け止めていたように思われる。

大学生だけではない。今、大人達の「仕事の場」で何が起きているかを考えるに、こうした足元を固める大事さや、自己への肯定感がぐらつく現象が起きているのではないだろうか。キャリア教育の素地作り、根底を支えるものの大事さ、そうしたことを一連の授業で考えさせられた。

若年者のキャリア学習は、若年者のためのキャリア学習だけを考える場ではなかった。それを通して、社会へ出て行く直前の大学生にとっても、また筆者自身にとっても、キャリア教育とはなんなのか、改めて考える機会となっている。

■引用・参考文献

尾高邦雄(1941) 職業社会学 岩波書店

文部統計要覧 Statistical Abstract (1994, 1999-2002)

文部科学統計要覧 Statistical Abstract

(education, culture, sports, science and technology)(2003-2008)